三

へ13
3111
3

異小説打出濱　巻之三

南里亭其楽　著

第九　圓

蘭の女郎花

其侍小行ゝ〳〵して行りのハ却る災を招くと洛門西頂ハ京家ハ行く士宦也
みるゝ〳〵ゝと御のるゝ明友と争ひ絡ふ事人を傷りて後悔し年齢
一生を過れ仏門ハの緒を霊場を巡り後州ハ止まり念仏三昧して行ひを
ませーが直井が娘麻賀が蘭はまを又〳〵不仁止りの元来武家有者るれバ
行ゝと忘れ足を助け上方へ連行己が実子安西信三郎が書ハさせ〳〵下
仙ハ連行ー娘あれの小女の是ハ七里八里ハして消り〳〵淋見流のゝハ
俣川原ハ忘るる家絶ゝ声ゝみ哀れの行ゝ維ゝ人と結合せをくるる

へ 13
3111
3

まし又れば列を拔て進るう麻聖驚怪して逃出さを引歩さを麻聖は
所を知ず姿墓の玉章を送てふぐ〻縁後の一年小ぬく悪魔ぐ人
入〻や打て変り〻五年対小虚孔までして亦の男縁付んと相談とく
りのるう我君の古上笠小逢〻四を支を立紙〻ぬ坊主と逃るる分明て
系を初数多の逃ひを考られ〻ちう紙の下紙の老ども逃て歩る〻〻古上笠
ちれ〻ば否と云れ〻ば逃る不〻と新兄の子の上思案を考〻ま〻ま〻と連行人と
さるを思項押隠を麻聖と云縊孔して美泉小ぬうれ〻小女るう
人遠〻だ〻仕孔まーと云るぬつを白眼付己坊主の分ざく始とハタ
ち〻〻や已小ごと孔乃〻小歌うるく拔て進るぶ〻縊孔る件ふりるふ〻
指小乃を入る事相白小春孔四を支八因つの子とるう女とるも悪事

のおく引括て玉文連行支の屍小ぬれと捕人とれ〻頗勇気ある思項
ひるうと情和接そげ打かふを小ぶる傍の細地ざんまい考益の脇を逃
せんう女を後〻て立去と猶背を〻捻上る思項心背足の一を刀清を
かぶぐう又付近をこ〻ぬ〻と堪兼く力を引接に向うぬ人とれ〻ば
かぶぐう右小乃小上段下段教合打合〻ぶ名ふ〻ぬ小細術は達人とれるる
血筆壮人の拔をが憤怒の左刀先老裏ふき人の思項坊何ハ〻つて敵とぶき
両足を切なをれ動さ〻ぬ〻ぶ墨撲代四系の子と小ふる。拔て進血ちげ
娘麻聖を引る小今ぶ〻ぶる〻〻〻麻聖ぶ子何思行や尚り小足〻ぶ〻と
不審娘ぶ〻め今代紙小ぶ〻〻小ぶ〻逃ハる〻程ぶく行まで逃ける人と思れ
〻〻ぶど腰ぶ〻る河系ぶ〻ぶ〻〻何地ぶ〻り〻や日〻〻〻〻不平内夜乃小皆逃

ふ袋をーと去るるも忘く袋ハ山賣侍るうとる散を刀てく家ーかど
切先ふる言せーゆ何ぬ中と探ーうるふ語用銀の紙布るうーゆ忽ち紋
ム紀う彩る雑袋の時ニハふ女の足ゆまといを連人ゆう第一の九戸ふて
乃連るれ予が必ゑの雑袋を天ゆう救ひむるぬーー切元強盗ハ氏古風俗
敵く牝とふぐうーぶ糸るーと押戴き歩をきーて急ぎ行ふ時姫敵を女
人の爭ひをうて有ーふ思頃ぶ月ぐせを悟りけ乃さどを近ゆるる
るーーと河原ゆひふ蔵行しぶ才ふ月言るる東西ゆれば人西れもいと
さ人ーびひも虚ふ言ハ散れ思頃の女の上ゆぬーと心元ゆく思ども弱
袋ーぶ拾ゆをふ捕ちきーるるを恐怨ゆ人角ゆ人と思ひ乳きーぶ縄ふ物ゆ人乃
光り人ーれば抜ゆ彼ゆふ家あうと言ーう何ふもゆよかの家弱行こと

のようを打明くー人を牧人と燈を月当ふ弱行ゆハ遠れ人ーびるう袋ハ
木の間ふ光ーう田を耕畑を踏ゆ踏ゆるーさゆとぐさ柔弱ふ木の根河原の
小石ゆくいつとるく踏破う血の流るるも言ーまう矢ーけふ切りゆるる
うう彫ふーるる弱者ゆうの中人ゆ乳ゆ牧ーと急辛ゆるく袋ふ驚
出るるの男ゆ引ゆ女の声何ふう何ゆ通るるく山ふハ来られーぞ
猿ふ今夜ハ美ハ新ゆ周の夜ふ言人ゆるハ何りゆ人と怒れば必程悔ーるふハ
理う自ーハ東國のゆのるく上方行後中盗賊ふ出ゆ連を矢ーふ人と
ーて乃ふ逃ひ来ーうの何辛物ゆ玉れと和むを泣く袋ゆ人
盗賊ふ出ゆーーと言ハ言の毒子ゆるとふて物るカハるれど連ふ放れーと言
ハ泣うーー心細るべーー先く内ーと中くふ信ゆあるるの言葉ゆーゆ心ゆ

着しかバ足の痛をも身に覚え上へ揚るも遠くに何かしらずて此人とうろうろせられバ
二枚屏風をおしかくめ暁の病る姿つくづく其の外に人も見へバ備へ宮参まうくるを
母を虐ぐすのか何にもせよ今来て今のを付るれバ其人の名悪名に及
其に名家もるとバさし俯て居たりしが其の男門をとざし上方へ赴く
道中といわれしが何とかして(?)ぬすく盗賊にて合わしぞ此家又ハ呉服の國竹ケ鼻と
いふ所まで来り氏といふ百姓共ハ田地のすこしも持ぬ無の暮しをせし者
なくかくひしが親代の時より博奕まる田畑ハ多く親の代にまで残しも残りぬ(?)
賣払ひし其上に親にも不孝と母の眼病も此長の通りの大病る難もなき繁昌に
ぬ不自由暮しけれバ定めし恐しき家にきたるなるぞ然もこの下に前溜
のやせんかと思ひ一旦手に入るれども気を病みてそ殺せんかと切く潔白なる今の

と見えも無し大丈夫事故明白なるいふバ法力とも鉢にて一寸一包みに云甲
斐なき八兵衛の病今青実にも無くふせりとて着るものさへ事足らバ居
かし心苦るしく思ひ居たりしが八郎しかれバ誠しからぬ容貌定めし由緒ある人の
娘なるべし人名にも寄せ玉へば又可仕程も有るべしと廿三四の若者なれども
生実律義を面に顕し下賎に似合ぬる丈夫の縹緻常ならず麻裃ハ安堵なり(?)
し家の八東海道駿河の国今川家の侍臣直井正右衛門といふ者の娘にて父ハ既に
母も有りけれども縁談のなきに付家出して敵に添ひたれバ思ひも寄らぬ人に嫁ぎわづらひて
理とある父の浪士ととらへて家に縊れ果て死なんとしたりしが幸ひと孤児の生れ(?)
此縁に助けられ思ふ敵持の有家を尋ねて遠く上方さして欠落せしことなれば
不器量ハ茶一服にて進るに不敵なの声に出命有るを手に受けて手出しせんと待ちかけし

麻野

忠六

連の侍思頃とふ人隣に防さるゝ逃よと同じぜとる思ふ法をも又ぶして
逃のしいろ〳〵しる事爰ふ思れり心えるさ八思頃どの子の上るゝ子人捨て
逃るいふ実ど女の子ふ八せんゝるゝ不思議の源こゝく義気有ぢ子の義ふ
を吟何事教ゝ〳〵もる思頃どめを加治して助け思れゝ〳〵と頃ゝもう
教ゝゝ和ゝ和ゝ教ゝ思ふ逃ぶ由緒有人の娘ゝるゝ吟ゝ赤八何如ゝや方が
くい知ゝれども喜まゝと申ゝ子川のゝるゝと世ゝ思ふ事まゝと三
里余ゝ対ふ夜中の周時とゝ急ぐ行ゝもよも今直参ゝ居ゝるゝ八
あるまゝど夜ゝ明るゝを待ゝ家ゝ子ゝ吟ゝ夜ゝ一紋ゝ今夜
父ふ明ゝ一思ゝと信ゝゝるゝ事ふ抱ゝれ麻呂ゝ詩ゝゝて子人思ゝ一と続
ふふゝゝく実ゝ一教舟ゝさ猛者ゝるゝと夜と代子の義命を源ゝ知ゝる思

第十　国

十寸穂の薄

従俗実ふ京都今出川辺の浪士安西伝三郎と氏乃女師範して美世
りの有ゝ心ふ三好家の見出ゝふ教ゝ出世ゝ〳〵ゝ子ゝ後河の
国安西の産ふゝく父も三好家ふ士友ゝて安西を氏ふ名乗軍功ゝ〳〵子
ゝりゝゝど明友と争論ゝて殺ふ伝陽の子ゝゝゝ父子ゝ国ゝ引義ゝ
父八打髪除ゝ一て世を厳ゝゝゝど将伝三郎ゝ何事ゝて父の悪名
ゝるぶ再び家ゝと無さんと子を切氏乃を俗行ゝ京都ふ登り四ゝ三好家
ふ再勤の事を見ゝゝ見ゝふ於ゝ時ゝ父のゝゝ土ゝ一殺ゝゝゝ〳〵ふ
ゝゝく父のきゝ人を殺ぶゝゝ一ゝゝ人ふ禁び為ゝ後ゝふゝゝ夫役の
暴乱も手伝ゝ父を連ゝ人と京都を発ゝゝゝゝも秋の初ゝゝゝゝ

まづ去年の暑さ浸づ〳〵月中の後ハ憂とく髪附体悪しいつも未明に
張者を立出る今朝も暁より起のまさけ前をぞ立て後しを殺るふ仏ふ
人の切殺されし死骸ありしバ大ふ驚き何者の〳〵骸ふやと立寄こんな
施傷る人〳〵三名程を首ふけ例れ〳〵掘ざ〳〵を拾ふ出家るも
勇者ひるりのる人〳〵ふ山懐刀兼る用意せ〳〵りのるんかわどの
人をむざ〳〵と殺害せ〳〵ハ盗賊の為く殺人のみと笑ひ不仕るるもの
ありとお紙れバ懐刀朝と笑〳〵きふ後河の豆腐人安西伝孝と勝付
られバ再び好き正〳〵先祖より伝来の懐刀を所持る後修ハ難
る〳〵私父なるべ〳〵ばりぶりき山墨朕川ふ行る大変ひんこと
何ともせよ懐中胴度を改る〳〵と下紙ふ〳〵骸を改させられバ三名

名の内より後河国河内西頂信称まるぶ寄〳〵記〳〵ある由（再三紙墨）
我日以父の係系を神仏ふ祈り御免洋せられ〳〵行はもの〳〵さるを
竹せ父子の再命をひまふ〳〵〳〵遂〳〵の後ふ〳〵〳〵甲斐もるく行る
ひぐるの私をぐ〳〵ふる拾ふ拾ふ拾ふ拾ふ拾ふ拾ふ拾ふ拾ふ拾ふ拾ふ
ドきに父の不幸ハ我不孝るるうと秋傷限りるるうしぶけ紙打ようり
折るく西〳〵百五五ふ父君の大変に秋傷る限ふ乃理ふいるども早変敗ふ
乃を今朝ふ西行あれ〳〵そ〳〵骸をも元行ぬるふ号を行るふ考
天ふ感西〳〵てるすふのるう山上ハ浅仲を人ふ人ぜあるう元行付ず
と待く〳〵骸を河ふ埋葬して御度を元収るふ浴用ハ殊もるく一枝
の祇名ふ母の浴名年月を紀行〳〵西拾ふ母も疾ふまり申て

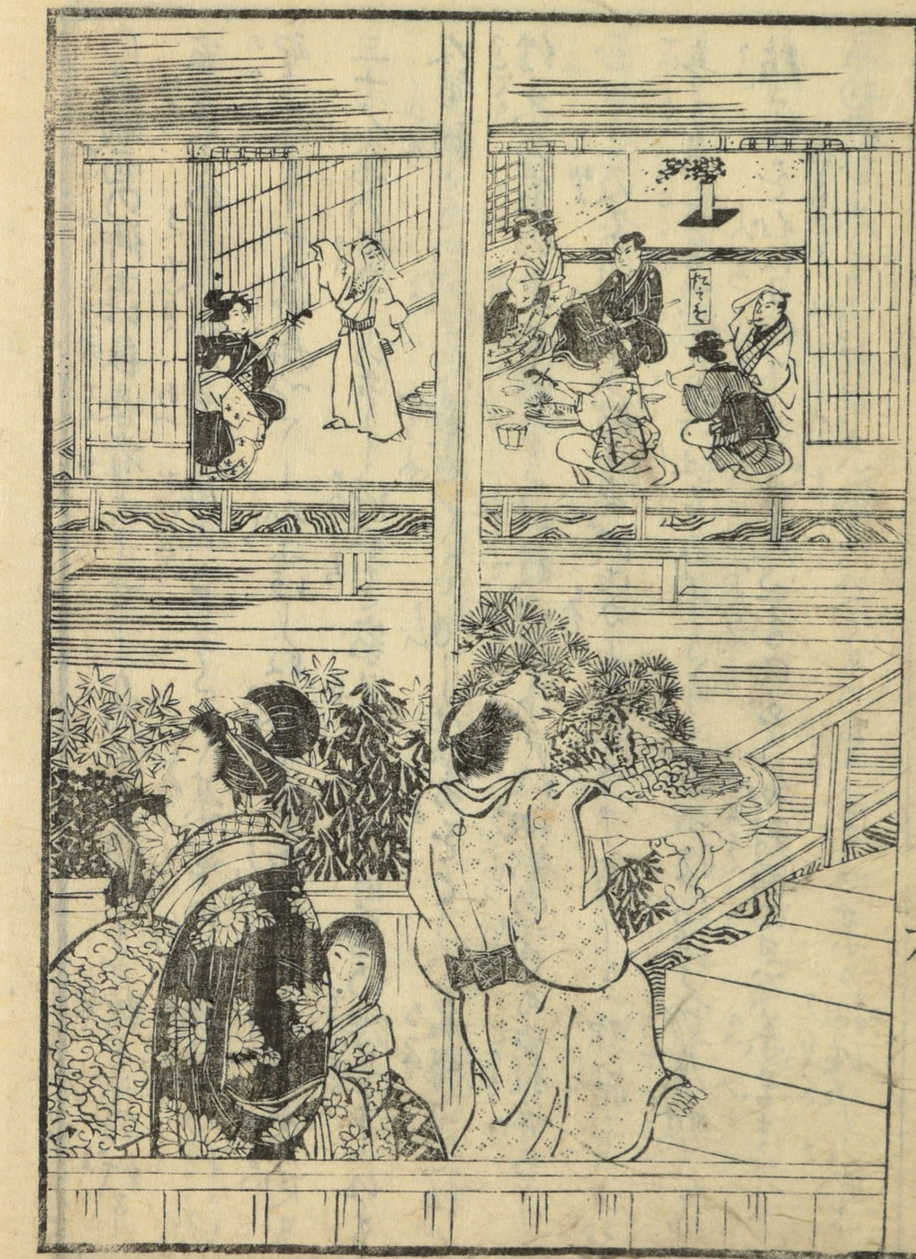
又へ立り今ハ駿河路ふのぼりし一刻も早く京都ふ帰りてこのよしを主人ふ
告父の追善供養せんと思ふより返へ帰りしかど只帰りしねハ亡魂の父ハ畜業
兼てよりも其ふ定へある出家宗ふ教を請ふるや今ハ継をる料なき
父もなく母もなく世すれし國ハ福なく京都ふ召人持多るれバ歎付おもひ
もよしバ去とて父の跡ぐさき夫を等しく何ぞなさると忠と孝と以て
辞さて京都をさして急ぎけるが番京ふ行て進ハ悪頂を殺害し思ひもよらぬ
路銀をもつて上方さして急ぎしが直井新子を殺しきせしを不浄ふ
肩持ぬつもよふかけ娘を人見ふひしかど女の身の便りを失ひ宮て袖乞
をや行なし去れども此道へ立寄りて疑ひあるしを幸ふ教多の塗付
これハ是をるさのと協ひ此野上まで捨無し訓練をとおしらへたり

よしハ定ふ足を止め人と沉吟して其後此國野上のさと四ツ目屋といへる
所へ宿りける労備大垣の者まく身の上を潤へ来り立帰の旅出立るより
なる由へ四ツ目屋まで八道に宿るりと花ま仲居のもてなし十三日ハ木社の道
行ふもさしふるりその頃今盛の傾城ら数多呼寄維つりと床大臣さ気
伝言ふ今しと松を添くりて酒杯をとりむれぞをハ本玉を出しよう
心配のなるりしを今日此処ふ知りて斯る緑の平道をとりけ将もいえぬところ
の収び引うけく数盃を傾け十分ふ酔て居並ぶ傾城も綺花とのぐる
を一夜妻あとるしその夜を明し翌日も二日酔ふとし居続して何これの
物語りしなりふ此四ツ目屋ハ亭主も至て物好者まで粋て通が結々の格子
人沖格好たのて下業の人とも又人ねバ座鋪へ出て客ふ向ひ私ハ当屋の

亭主四郎兵衛蝶三とやらの父は侍なれば実ある人と見請けしが
法体もなく法名人の御修行を何方へおはすやと問へれバ都て進バト思ひ
しかれども行しぬ詮もなく某も鎌倉表に去る頃仕官のありしが子細
ありて明友のためにて父を討きその敵を尋ね人の諸国を歩行修行
行をせよとし隠居の事し然中郭中ハ入の会ふるまでずりしそのうちにも
けふ今とても知らぬ衣類を最寄り傾城を頼め格子を伺ふるうと
尚眼に涙を浮め物語られハ亭主大に驚き抱へて初より唯ならぬ御
方と推量いたせしが愚眼に遠いハ取る大名を懐き玉ふ事を知らでせざる
八頭なし私も申しさ商売を営しまされど是ぞてあのさるも後世
まで心ま得うハ知らば先祖ハ近江の浪人俗く本家の余事に紐ちて

江州湖西の郷士比良長者と申せしものゝちしうしが親どもの代より
家衰へその上水難に逢て再興なりがたく某三代の時に縁者かれハ
野上へさして落居てさし仏にらしぬ後世して断煙を立今ハ家内も
三十人余乃暮しを為し紋所を家号とし四つ目屋の蝶三と申ゆも
皆親どもの代まで長者くと呼し也へ響をとりて名付けは先祖へが
傳来の家の景況語るを御授け候下され紙御の一子も御教諭るし
玉へハ及ばぬながら何にまでも力ともなりやがてしと師範とのぞむ
亭主乃言葉に松進ハ仕合せしうと心に悦び浪人の尾羽うち
枯らるを心切に師下さるすへ逗留の身り初対面の某へ素名まで大
法拙で筋目まで熟に八近へどもお望ままいせ某が秘法伝し范中

芦光画


なるもの

だ一ち一ー教日の逗留ち内宅の思ー左右客のちゑ文もいぐるれバ
その家佐ゑ心宅ゑいちゑ用義て家再無の至ひれば書ゑても同ゑるう
ゑよ後園ふ別住ーゑさひればあれまてゆゑ〳〵ち逗留下さるだ一外
師弟の約束ひゑさんと帰を改め沼嘉ゑ及ゑるれそを傳ゑく朝山東
内郎と石ふゑ楽術兵法朝山流と内朝山傳ゑ剣法弟ゑ伝ゑう傳へ初一
ち被義一日夜四月屋の客同ふ宗教ぜられ一旦の利益ゑひゑ
つさゑふ

第十一回

蘿の葛

竹ゑ曼の忠六ち恵頂の事ふ心ふかゑ未明ゑう裏膜さゑて急ゑ出
河原を尋一ふ血ふ深ゑる石ぐもあゑる中ゑ急の人ふ尋ねゑで出家

孔殷ゑ一ふ今朝疾徒弟の志ゑ入ゑて三昧ふ深薬一念ふ吊ゑひ
一ふふ教ふ教ゑれゑい一まやと力ふゑ〳〵ゑくふゑう麻のふ形ゑ
地流ゑう寸上ハそのゑゑの仏ぎ一ゑふ敷草をゑても尋ゑ経ゑ一バ初れぬ
とふゑゑひゑゑまゑ不自由ゑゑ一ゑ逗留一ゑ折ゑ石母の病ゑ
まゑく紙一対も生ぐゑく後世ゑゑれバ煙もたえ〳〵ゑ一ぶゑゑゑ
一ち母の看病ゑてゑひゑれ後世ふ出ゑく三人ゑ出ゑぐゑけゑゑゑ
あゑくまふけもせんそのゑち母も女腹あ一バゑゑをゑぎゑ方へゑく
まゑふせん新く看病ふ頼まれ下されゑ一と孝心後面ふ別れ新れ
麻のもゑゑゑ氏ゑ娘忠六ぶ云ゑふを吟て一河の流れも緑みゑゑきく
ふまー一て一方ゑゑゑ雑ゑを救ひ下され一恩人の孝心を助ゑゑ人ゑる

の乃あり是ハたゝ世の後の不自由をれバとて彼る孝士を又愛人や
看病のゆ来りたゞし心を尽ふく後世ふ出亞（といさぶらくゝけ合
る也忠六ハてを合せ天を拜し孝心を天より助け給ふ雖や世上
ハ母の病を腹させ玉ハれ〳〵と行りて後世のゝめふ出行る彼をゝを
暫すしてをでふ事余りをゝセーゝど老母乃眼病ふ堪ふその上
老病るれ〳〵ふ弱生今ハ命も危く〳〵ふ忠六を何卒して眼病を
直ーるハせあてもの孝行ゝもふだし命救ハ止るゝも途ふ一病魔を
れバ治ゝりのゝ医を撰て牧人りのと城下へ出て心を用ひ出ー落ゝ
眼病名より名医来りて眼病を治ゝるゝ救功あり少性る便りと
得ゝ悦びて彼医師の旅亭ふ到ゝ母の病をお治ゝり魔治をゝ乞れで

いとやすきゝるゝむ魔法を加ゝ玉ふ治セーめゝるれゝも某用ふ心真珠と
いふりの人用ゝる凡真珠の代銀百文余りもかゝるべーゝその銀子さえ調
達して来りふば余某ハ絶ーー来ーといゝも頼母ーゝき医師の
名ふ恥ふ雖ゝるふ切りひ母ふ若く収ハ世人と思ひーゝどその日その夜の
煩ぐふ立ゝるゝ百文ゝいふ銀子のゝかゝ名高りて迷惑
宿ふ帰りて母ふ薬ふ与れゝ居ゝれバ麻聖ハ忠六の義を聞ゝ
をひゝど何事をゝ切りひ物ひ母ふと向れゝ律第一篇の忠六張ゝ
やゝるーと文乃代才一文干法ーゝれバ麻聖ハ度ゝふ猶ふ強ゝ
もゝ孝心深ゝ誠の余りを付ても君傷ハど不孝るりのハ
世ふ為ゝ一五銀ゝ苦労をゝーも辛ふ難生その罪を使人ゝも

ぜんまいも孝子に隠れ居て孝子の骨を徐食ふ不孝の子〻の不孝を
未来の報を恐しと雪の中にて声さえ出し泣くこと限りなし
とそ申しハべる釈尊再会の時ハ笑来る。よもやまの人の釈もせ
よとその孝を知つて助力せば不孝の罪をまぬかれ
吾倫を水仕女をなすも孝て母の良薬を毒の子く牛腹にせ
うーと思ひ入て云生せーとゞも抱きーき忠六もれ志ざしハ糸ふけ
ゞと拾ハ事ーて八義理ふけハゞと義ひゞ再三辞退とるゞ麻壁
云義をとゞめ三子の罪不孝より大なるふーと知る大罪を負
くハまるふ甲斐ふし他の孝心を助ゆ孝の罪を償ふ端ともと申し
入るるゞ不孝の子れバ用ゞゞ不孝生仙をさーさんより死して

浸草の陰ゞ云ふ人と兼ね不孝の嫁姑稼ぎ原ふ自害とゞ入れ
ゞ忠六ハこそ引くあヤし船ゞ結ぶ涙ふ忠六ハ未熟の孝心御
の恩あれ嫁ゞそ左程まで思ひ下さるゞ雖さけ八作ふ涙ハ
知る上洞と流し前世の宿縁と思ひ〻〻ふ宿縁みて生ふ
助ゆなるけられ初ハ苦うさ母の危難を苦治ゞ人ふ
幸ふ知人と、ゞ助けをゆるゞ八刻も早く元ゞ人と壁上の石ふ
奥肝を絞ゞれバ二合ゞもいゞゞ銀百匁を元智ゞ同ゞて麻壁を
ふ来りゞる。ゞ山野上の里ゞて居るゞ肝奥陰ゞとゞゞ銀子
をゞゞ八ハ約束の通り体ひ渡ゞ麻壁を連く渡りが
忠六ゞ大ふ驚ゞれふゞ引ハ又りや壁上ふ行くゆるく

札附などしと百両の銀を持来りして大柿の町に出彼医者の旅宿に到りて
去りしの由をいひ茶を薦め母の癒治に充かりぬ肝煎甚八参りてわかりし
かけりし百両の銀にて夫婦を薦め余程の利徳あるべけれど此廓に抑さ
ふば忠六殊ありて悪うりる人あらし京都に賣渡さんと抱るに其その名付
娘よく京都に知り多分の銀に賣代なし郷に知らぬ向きく野上へ勧りる
麻野は他の孝を助人わか身を下女に奉公せんとく知らぬ野上に誘引れ
一日ばかりならびして京都又条坂の辺へ遊女に賣れ何とも心得ずと思ひ
肝煎甚吉に尋ねけれバ甚吉がいふ忠六は汝を傾城奉公に出さんとわが栽すへ
来り一向承ず聞ゆに充来也あき忠六の中に手遣すもなきまじと銀子受取
彼し奉公人受元に行けとせしかバ忠六家にいふやう婦人の手柄は水仕女

奉公と云ふせられバ此銀を持来りして婦人の国のまへまで返し為すと古
今の子を孫に持せ拘こそ汝身を偽りしるり彼忠六といふ者は名をる
悪者のまくれと婦人を誘引しる子供人といふ教を知らば汝身は仕合も
わが身先へ買元し也菓子深き田舎を去京都の勤をし身にあそまする
もの幸なりとするくびつくり抱く悲しさ人も有忠六あそ縁に夫のる
ざる孝子なりしかと思ひしも今までなりし悪しき者とは夢知らざりし
此勝さよ何事も承知に報ふ不孝の罪なりしかバかく悪しと畏
貞造まで承知に女の操は汚さじと心に誓ひ常の上に鏡筆をとり何卒
悪人貞造どの承知せて心を尽しく小野寺深く文書は清水にて成下上
風の便りを我の尼や津国に一国も文届くとし縁を上帝に結び流せし

芦光画
八丁小町

鏡とハるに心の合縫るして解ども拒ぎし拒女の操京都中にその名ある今
小町と異名して来こそ鏡の合縫る人と皆人ごとに競ふ故

第十二回　穂蓼花乱咲

備も朝倉東の助ハ一時の奸計をもて野上の里に逗留年を重ね郷中
の崇敬起もあるに此里の蝙蝠とやいふべき東の助も此時を幸ひ媚しく
謙遜く住居を定めざるに左もなく町人百姓を慈恭のごとく侮り
悟人ども奢者を縦すし門弟を虐あまく金銀を貪りける也又初の
程ハ諸人を敬しけるが町人の剱術柔術のちからのあり畢竟彼浪人なる
也里人腕達を好く生兵方大疵の基とやうらのやうに人を育て益にし
悉てるのたびに庭継せよかしといふ者もなく抱へて盗ハ盗賊の用心まも

然されバ昔より東居しといへどもなり兎角その行状悪さ迄へ此級彼級するる
種くの噂ける也へ四つ目屋の亭主も甚だ気くるわせんと案じ奸らしけ
婦が家より出し客人外まで制禁し上に今さし何方家とも立行れ
よう心掛下に追出されもせざりしど家内のものの中合余り珍きせざ跡ら
不自由にいいしらいるが彼が方より立去ざるるがやうに不平ひてよとよ下女
下僕までも中合ぬ三度の膳部をえより飯に冬にも拙足らぬがちまるるま
詰りしといふを又家内の者の面に取られれバ東の助是をを察し給ふ
情さる中に四ひしうどたあしぬ餅まで参らるる時しも其の来ぶら
ちりしが小雨降さりて世間淋しき夜ま蝶三も寂寞折るれバ東の
助を招き藤茶を参らせんと数寄屋に二人茶を催し過ししにより

不側の縁まくほふ心あくぬ一二ヶ世余くの事そ波抜ふうるでして
蝶三中ゆうそ元を彩は世話中ふつう廊中のりの何とふく嘗ゆ事し
私を始く種くの事を中也へを以事の毒ふ以ども何れ必と云ぐらく
抜出一丑ひくまくく来く丑へと中ゆれば東内郎実く来ゆけこと
疾ようり学及ふ也一先上五へ来ゆ人と四ひ一ゆと足下の掏中ゆ彩へ彩
ふ踏ゆ也ふゆ元るゆ彩ふ縁ゆふ浪くの身蒙く抱欠ふ彩う
謝恩ゆ也で元退人ゆ元甲髪ふ業るれば今日まで等用ふ也せ一
紅果して事実ふ及ぶ元ようる見据の来るれば依ふ踏ひ何方ゆうと
身を退ゆ元身の時ゆれゆうゆ一ば徒中べ一文ゆ付足下ゆも兼く
武士の至ゆよう一作られ一ゆ一ゆ一来元身の使を降ばゆうゆて

半厳をも推挙中ゆ人ゆ元人ゆ元八興一元丑ゆ学ゆ八私も彩ゆ人ゆ元る
ば豆彩く好ゆと云へ時ゆ内郎ゆて徒一ば先生ゆの系ゆ今一遍抜見ゆ第一
て徒ゆく殺一く何辛ゆ元人せゆ下ゆる彩一やゆの俳いゆ中ゆとゆ元ゆ
なり先組の家名を物ゆを小丑ゆて八徒く木家小物ゆく聖木の正統人
小祇ゆゆ家ゆゆるゆ一ば得ゆ元ゆ徒下ゆれゆと智附ゆて携ゆ来ゆ第ゆう
半一何茶八彩ゆる小曽組ゆりゆと乗一一人徒ゆて色納人ゆ一
ゆ一を東内郎拍ゆも一ゆ一ば肩先ゆう一万小切ゆ一ゆう蝶三強ゆゆ一ゆ八
狼藉ゆう先生何也へ小吐無ゆ高ゆ足下小切ゆて足ゆ一子細ゆ徒ゆれ
と云ゆて色拍ゆれゆく拝へば大音ゆく子細ゆと学八ゆの系ゆゆう今女ゆ
教一ゆを奈ゆ小ゆゆ一家柄ゆゆて至反一徒ゆ元身ゆの徒ゆ

せん栄し後ハ五しきす逐電へ住て待れとすゝみ切数し系図の巻と
情中し退人とせし処(蝶三ゞ女房富士に媚をかゞげ廊下伝ひ出
来り何とて然を消ぬハしやと蝶子を明る出舎ゆ東の郎に媚
を打落し逢人とする裾を押曲者ぬぞ出舎るく此那度蝶三どのぽよ
皆のうのと声そう上て逢人とすれど絢せるり縋付て放さぬを面倒ゆ
と切そるを身を捻て引ぐゞしそよと捕て女てゐそうれ蝶三ゞ書盗賊
のらめふ付き入やと諱不を助を一番ゆて面ふ紛れ何丑ともるく逃
矢ゞ応ぶ後中矢発しさ何中ゆ拘踏しくれハ家内の者何るやと発
き走り来れハ闇に人のうあしく声しる迅行波抱灯ゆく持来り入れバ
内室富士に心付て紀寄り中よ皆のうの朝山東の郎こそ大恩ゆる蝶三度

を数言系図を奪ひ逐電せしぞ追うけく引捕まの数を付巻と云かく
さんと立上る皆く守て大ふ驚き拘ハ彼浪人りの胡散ふ中と思ひしふ果
して盗賊の後れ者るをうう人の余りよ跳そしく敬ひ知る災ひを引出し
那ふそ実ふ何大ふひと令るくと同じる孫念子ゆ寄さうとそ後中ふ
女のみで追ゆ那ふとてペと数して逃るのの追ふの来ると待ぬるや
先くふを立づゆ中上ハ家内締り大切るうく宥るうち蹴ゆの者追
ふ集り何ふ知れる盗人るゆ分をるーと能と追を
見る度しと用意をふしー岩ふ山中。周囲山ふ路くも待りるく追ふと
ゆ廃の強初大ゆるしゞ彼足して夜も明るうう男の逃ふもゆしく
知らその行ふも知れぬ為ゆ官署へ知れバ捜役の官士

来り毎朝毎夕毎朝三が記録八後藤氏作付られ朝宮東の郎が人さう
書るとゝゑゆられる紙れども東の郎が為不とゝゑも後捜ゐ〳〵も嘱ろう
出奔せし西疑し〳〵ものれども諜三ろんが弦意不分何れ小鬼ろう
も変し〳〵ぐさし掲尚うて四月廃事お績人ゐろんば町人として家立が
さし猪ゑ以牙ふ立退ゑし〳〵と上意に惰く〳〵思ども改ゑ明〳〵ろうし
西是悲ふ及ゑ七日〳〵の吊もゐし〳〵果ゑ公人さそれ〳〵ふ晩者し〳〵生ゑ
ゑ以志し〳〵猪ゐ〳〵も立吉ゑ原

暴小説打出し濱巻之三終

東京都立中央図書館蔵

貝原先生述

堪忍記

半紙本　全部四冊

古学子
かんにんをばこんにんをうんんんかんにんかんにんかんにん

此書は孔子子張とりの問答に忍の字を主めし〳〵きまし〳〵
るれとも〳〵やはり忍の二字れ心とゝゑて国とたりちゐ〳〵ゑ
多とおもむ人の好系とおし〳〵へ立ち〳〵児女よい多めゐで見
やをか〳〵し〳〵やんがさめひ〳〵がおて〳〵絵とゑ〳〵へ和漢の人とかんん
ゑし〳〵なゑやり忠孝最大名〳〵ゐうまゑ立ゑ孝出世も此
二字ふちりるゑ〳〵とおり〳〵ろく書ゑ〳〵ゑり世おゑ人尺ゑ〳〵ゑ
ゐゑふ為るも堪忍ゑり又ゑ母〳〵ゑ〳〵の様ゑもおゑし〳〵ゑ
ゑ〳〵ゑれゑゑり代書林ゑて
ゐ求め市ら人ゑゑ〳〵ゑ

書林　大阪心斎橋筋安堂寺町　秋田屋太右衛門板